

義者に近い。これは、中国政治の現実の展開が、彭のかつての立場に転換を迫ったとみるべきであろうか？

欲しい革命家

としての彭像

本書は文革期の思想家彭述之の立場をよく知らせててくれる。だが、革命家彭を見ようとすればバランスを失しているとの感は拭えない。革命家彭の理論と行動がまさに問われる「五二一七年の論著が落ちているからである。当時の彭（ベトロフ）をして糾弾したのがキム（少年国際）の代表であつたし（「上海からの手紙」）、ライバル瞿秋白が彭を「書生流の革命觀、政客流の政變觀」をもつたメンシエビキと痛烈に批判していたのは周知のことである。

また、かつての同輩張國慶も、彭は中山艦事件後に右翼的誤りを犯し、蔣介石の一七一年クーデター前の南京暴起の指導を放棄したと論難している（この点については、香港の『明報』月刊誌上で二人の間に論争がある）。当時の彭の立場を知

るには、二七年六月の彼の論著『中国革命の根本問題』は欠かせない資料である。このほか、本書には入っていないが、中ソの論争と対立についての彭の立場も知りたいところである。

なお、彭述之と一九三二年に合流し四二年に袂を分かつた王凡西の『中国トロツキスト回想録』（矢吹晋訳、柘植書房、一九七九年）を併せて読めば、彼らトロツキストの内部抗争、絶え間ない苦闘と苦悶の有り様が一層鮮明になる。また、終始民主主義者でかつ強烈なナショナリストであった陳独秀と対照して彭述之の思想傾向も改めて浮かび上がつてこよう。

毛沢東、周恩来、劉少奇、そして「異端」の王明、張國慶など、いま、中国革命の第一世代はついに彭述之を残すだけとなつた。だが中国の「革命」はいまだ終わつてはいない。その多難な過程と複雑な内容を理解するには、さまざまの登場者のいろいろな角度からの証言が必要である。本書はその証言の貴重なものである。

（評者は日本國際問題研究所研究員）

円・ドル・金

（荒木 信義著）

戦後の通貨体制は、ドルと金を基軸に動いてきたが、フロート制以後、まさに激動の時代を経て、ドルの弱体化、強い通貨の浮上、石油価格の急上昇によるオイル・マホーの登場など、話題にこどりかない。

筆者は、そういう通貨情勢を克明に追い、危機的様相を呈したヤマ場をわかりやすく描くことによって、複雑なからみ合いの解きほぐしそうとつとめている。田安、田高とともに、「専門的」にも、「実は経済力の相対的関係を見落とさないが、著者は日本経済との関連にも要領よく触れている。

この種のものに手なれていた著者の本だけに、格好の入門書でもある。

（教育社 一五〇〇円）

（リフ・オーム・クラブ著）

二〇世紀の残り二〇年間、「日本はどうしたら米国を日本と一緒に生き残すことができるか」。こうした問題提起が妥当かどうか議論のあるところだろうが、官僚、エコノミスト、ジャーナリストから成る若手研究集団が三年間このような問題意識を持って、貿易、食糧、技術、防衛、石油、援助、金融、財政の八つのテーマについて議論し、その成果を政策提言としてまと

ある。すでに一部は週刊誌に掲載されているが、改めて読むと日本最大の教團が、いかに「教祖」の池田大作の恣意的行動によって動かされているかがよくわかる。

とくに盜賊といふ反社会的、犯罪的手段を使って反対者を封殺しようとしていたのは、実行者が宗教団体であるだけに恐ろしさを感じさせる。本書のもう一つの主題である「シーホース」の倒産については、著者の弁明のところもあるが、顧問弁護士が余りにもコミットし過ぎることとの危機性を教える。

○円 体験的経済記事 の読み方

（太田 稔喜著）

新聞の中で経済面はもつともむずかしい、といいうのが一般読者の感想であろう。これに対し著者は、何とかやさしく書けないものだろうか、といいう意図を絶えず持ち続けてきた。

本書はこうした視点から、経済記事の読み方をくわしく解説すると同時に、日本経済の構造を身近な問題から脱き、また戦後経済の流れ、八〇年代への視点まで、広い視野に立つて日本経済を展望する。

卓なる新聞の読み方といったハウツーものではなく、しかも体験に裏打ちされた好著である。

（三修社 二三〇〇円）

ふだん、新聞では日米経済摩擦についてのニュース報道は多いが、では具体的にどうしたらよいかはあまり書かれないので、本書の特色は、日米経済摩擦の解消に向けて具体的かつ現実的な政策提言が行われている点にある。

（ダイヤモンド社 一一〇）